編集後記

新年度を迎え、各地の花だよりを耳にする季節となってきました。会員の皆様にも、お子さんやお孫さんの進級・入学・就職と気分もあらたなことと思います。

藩政史特集は、大分県史編さんの準備としてスタートしたものでありますが、早くも三号を出版することになりました。大分県史編さん事業も、新年度から本格的に推進されることになり、予算・定員とも十分とはいえませんが認められました。これもひとえに会員各位の御支援によるものと深く感謝致しております。

さて、本号の巻頭には第八五号につづいて半田隆夫氏の杵築藩における「青莚仕法とその経営(二)」を、以下栖本・高原氏の論説を収めた。

半田氏のものは、青莚の乱買・乱売、杵築商人と大坂商人、あるいは物価統制策である株仲間解放令等、杵築藩の青莚仕法を全国的視野から究明した労作である。

栖本氏のものは、紙すきを中心として、因尾村の農村経済の発展過程について、地方文書を使っての論文である。今まで研究の対象として取りあげられなかった因尾地区の歴史の一端を知らせる貴重なものである。

内容は三つの論点に立ち、専売制という枠から抜け出し、封建社会を否定するまでの成長はみられないが、その一端をゆるがす成長過程を解明したものである。

高原氏のものは、小藩分立という複雑な本県の中にあって、更に複雑な形態である「一村数藩分属」の事例を最大もらさず抽出し、その経緯を論及したもので、県史編さんのための基本資料として価値あるものである。

文化財レポートは、文化課の渋谷・高橋両氏のものを収めた。両方とも専門家としての立場から、「現状と課題」「大分県の埴輪」について言及したもので、埋蔵文化財保護への啓蒙という点から時宜を得たものである。

研究ノートは、第八七・八八号につづいて安部氏の「羽出浦の歴史と民俗」を収めた。学問には年令はなく、周囲すべてが学問の師であることを証明した頭のさがる労作である。

(橋本記)